

# 3年間を見通した指導で、生徒の学習習慣の定着と進路意識の向上を図る

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 遅刻が目立つなど、生徒の生活面に課題があった。また、入学後の生徒の学力に低下傾向が見られた

### 実践内容

- 正門での声かけ指導** 教師が毎朝正門に立ち、登校してくる生徒に声かけ
- アセスメントや模試の活用** 生徒の学力・学習状況を定期的に把握するため、アセスメントや模試を活用し、1・2年生への進路指導を強化
- 「枚高マップ」「教科スタンダード」「大学入学共通テスト（仮称）」への対応として、3年間の指導を可視化し、教師の目線合わせを徹底**
- 授業改善** ICTの活用を推進し、アクティブ・ラーニングを充実

### 成果と展望

- 生徒の生活態度や学びに向かう姿勢が改善され、地域から評価される学校へ
- 生徒の進路意識が向上し、志望校決定時期が早期化した
- 教師の連携が強化され、指導方針の統一が進展

## PROFILE



大阪府枚方市内で最初に設立された府立高校。教育方針として「自主・自律」「誠実・勤勉」「清新・進取」を掲げる。国際交流に力を入れ、夏季休業中にオーストラリアでの語学研修を行うほか、世界各国からの留学生も受け入れている。

設立	1963（昭和38）年
形態	全日制／普通科・国際教養科／共学
生徒数	1学年約330人

**2017年度入試合格実績（現浪計）** 国公立大は、三重大、大阪教育大、大阪市立大などに6人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ605人が合格。

住所	〒573-0027 大阪府枚方市大垣内町3-16-1
電話	072-843-3081

Web site <http://www.osaka-c.ed.jp/hirakata/>

## 生徒の変化を目的のあたりにし、教師の連携が強まった

大阪府立枚方高校は、2007年度頃から段階的に指導改善を推進している。

最初に取り組んだのは、生徒指導だ。以前は、生徒の自主性を尊重するといった文化が強く、体育祭や文化祭といった行事には全生徒が熱心に取り組む半面、遅刻が目立ち、授業態度にも課題があった。そのためか、入学後に成績が低下する傾向が見られ、地域からも厳しい目で見られていたという。そこで、生徒部の教師が毎朝正門に立って登校してくる生徒に声をかけるなど、きめ細かに指導することにした。すると、2～3年ほどで遅刻が大幅に減り、授業態度も

落ち着いてきた。生徒部長の藤本信吾先生は、次のように振り返る。

「教師が生徒の変化を実感したことで、生徒部以外の教師も進んで正門に立つようになりました。提出物にも統一した方針を設けて指導し始めるなど、教師間で力を合わせようという雰囲気が強まったと感じています」

また、部活動の活性化も目指し、生徒の参加を奨励した。部活動の実績向上も追い風となり、以前は6割に満たなかった加入率が、数年後に



**松浦正明** まつら まさあき  
大阪府立枚方高校校長  
教職歴34年。同校に赴任して2年目。「生徒一人ひとりを成長させ、将来の夢に近づけるよう導いていきたい」



**前出和彦** まえで かずひこ  
大阪府立枚方高校  
教職歴32年。同校に赴任して9年目。首席保健主事。「奇跡を願うより、努力の軌跡を残す」



**富田哲司** とみた てつじ  
大阪府立枚方高校  
教職歴32年。同校に赴任して15年目。進路指導主事。「小さな『疑問』や『気づき』が生まれる授業を心がける」



**藤本信吾** ふじもと しんご  
大阪府立枚方高校  
教職歴13年。同校に赴任して10年目。生徒部長。「いつも若い気持ちで生徒と接するよう心がけている」



**東大介** あずま だいすけ  
大阪府立枚方高校  
教職歴6年。同校に赴任して7年目。将来構想委員会委員長。「生徒にとって充実した3年間になるよう指導を工夫したい」

は7割以上になった。それとともに、上級生の生活態度を見習う下級生が増え、規律のある学校生活を送るようになった。

「生徒の中に、学校中心の生活を大切にする意識が根づいていきました。教師間の連携も進み、全校を挙げて指導を見直していく環境が整ったと思います」(藤本先生)

## 生徒の学力・学習状況を把握し、進路への意識づけを重ねる

次に強化したのは、生徒の実態把握だ。学力や進路意識の変化を客観的な指標で測ろうと、アセスメントや模試の活用を工夫し、特に1・2年生への指導を重視することにした。例えば、ベネッセの「スタディーサポート」の結果を実施回ごとに分析して、改善点を洗い出し、指導に反映させた。1年生では学習状況の把握に力を入れ、平日60分間の家庭学習時間を目指した。進路指導主事の富田哲司先生は、こう述べる。

「学習習慣は学力向上の基盤となるものから、低学年のうちにしつかり定着させなければなりません。スタディーサポートを通して実態を定期的に把握し、課題のある生徒には日頃の声かけや面談などで個別に対応しています」

G T Z (\*1) は全校共通の学力指標とし、2年生では「半数以上の生徒のG T ZをB2以上にする」といった到達目標を掲げた。

進路への意識づけというねらいもあり、大学

進学希望者には全学年でベネッセの「進研模試」を受験するように伝えている。模試の受験日と部活動の練習や試合が重なった場合には、うまく調整するように部活動の顧問から生徒に呼びかける。首席で保健主事の前出和彦先生は、次のように語る。

「部活動の顧問には、学年主任や分掌長を兼務している教師もいます。模試と調整する方針は、複数の顧問からの提案でした。生徒の学力向上を目指し、部活動でも協力体制を強化しようという意思の表れだと思っています」

受験後には、ホームルームや学年集会の時間を中心に、振り返りを行う。以前は事後指導の時間確保が思うようになかったが、それに課題意識を抱く教師が増えていき、次第に充実させていった。卒業生へのアンケート調査では、模試を受験した効果として、「入試を想定した時間配分の練習になった」「志望校選びの参考になった」といった回答があり、生徒がうまく模試を活用していたことがうかがえる。

## 3年間の指導の流れを可視化し、教師の目線合わせを徹底

大学入試改革への対応も最重要課題と位置づけ、現在では「大学入学共通テスト(仮称)」(以下、同テスト)に向けた教師の目線合わせに力を入れている。主導しているのは、「将来構想委員会」だ。元々は国際教養科の特色化を目指して設けられた会議体であったが、次第に学校

\*1 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階がある。

全体の指導を検討する場へと発展していった。松浦正明校長は、次のように話す。

「同テストの全貌が明らかになり次第、全教師が足並みをそろえて対策を立てる必要があります。そこで、若手教師を中心に7〜8人に委員を任せ、今のうちから指導を絶えず点検・改善できる体制の整備を進めています」  
 例えば、15年度に完成した「**枚高マップ**」(図1)には、3年間に行う学習指導や進路指導、生徒指導の内容や目的、育てたい生徒像との関係性などを図式化した。その意図を、将来構想委員会委員長の東大介先生は次のように語る。

「指導の全体像を把握することで、課題の発見、問題の解決につなげたいと考えています。行事や部活動などにも有機的に結びつけ、本校ならではの教育の充実を図りたいという思いもありました」

作成にあたっては、大阪府教育委員会の指導主事を講師とする全4回の研修会を行った。7割近くの教師が研修会に参加し、一つひとつの指導について、目的や行うべき時期などを話し合ったり、課題や改善案などを書き出したりするグループワークに取り組んだ。将来構想委員会で、そうして出された様々な意見を集約し、形にしていった。試案ができると、職員会議で改めて検討し、加筆・修正を経て完成させた。

「意見のすり合わせを重ねたことで、どの先生にも納得してもらえものができたと思います。学校の教育方針についても、教科や

分掌の枠を超えて共通認識が深まったと感じています」(東先生)  
 16年度からは、教科指導の目線合わせとして「教科スタンダード」の作成も進めている。それは、各教科・科目の単元ごとの学習時期、生

徒の到達目標などの一覧で、教科団が合議して作成する。当初はシラバスのような詳細なものにする案もあったが、教師が状況に応じて工夫できるように、指導のポイントを中心に示すことにした。以前は、同じ教科・科目でも学年に

図1 「枚高マップ」(抜粋)

	確かな学力を身につけた生徒 学ぶ喜びの生成	グローバルな視点で考え、行動する生徒 ローカルからグローバルへ
3年生	<b>進路実現</b> 受験前講習を活用させる。 限界に挑戦 粘り強く学習 志望校をぐらつかせない 授業優先の学習の徹底	<b>多様な価値観の形成</b> 外国語理解の能力 外国語表現の能力 デイバート活動
1年生	<b>学習習慣の定着</b> 多くの生徒が進学の中で、大学・専門学校というのはいったもので、こういった科目が必要なのか、また、どれくらいのお金が必要であるのかなど、一般的な話をする。その中で、生徒たちに進学というものをイメージさせ、生徒たちの学習への意欲を高める。 スタディーサポートの結果を基に振り返りシートを作成し、個別の課題に取り組ませる。 得意科目の養成 スタディーサポート等を活用し、進んで学ぶ習慣を身につけさせる。 基礎学力の診断/学習習慣の見直し 三者懇談により生徒の状況・情報を保護者と共有する。 文系・理系を知り、考えさせる。 授業に慣れる 遅刻指導を通して、チャイム即授業の徹底を図る(学習習慣の定着)。	<b>多文化共生</b> リスニング力・発音力の強化 国際教養科はCALL(※1)を使った授業により生徒のリスニング力、発音力を強化させたり、CLPS(※2)の授業でネイティブによる少人数展開授業を実施している 英語を恐れぬ NET(※3)の常駐により、常にネイティブの先生と接する機会を生徒たちに与え、英語をより身近な存在にさせる。

同校が掲げる3つの生徒像「確かな学力を身につけた生徒」「グローバルな視点で考え、行動する生徒」「豊かな人間性を持った生徒」に応じて指導を3系統に分類。1年生4月～3年生3月まで、各時期の指導ポイントを明記している。  
 \*学校資料を基に編集部が一部改編

※1 「Computer Assisted Language Learning」の略で、コンピューター援助による英語学習。  
 ※2 CLは「CALL」、Pは「Pair」、Sは「Solo」の略。  
 ※3 大阪府外国語(英語)指導員。



よって授業内容や進度に違いが見られたことから、将来構想委員会が作成を提案した。全体で合意を得ることはなかなか難しかったが、粘り強く協力をお願いしたという。

「先生方の合意が形成されないまま、取り組みを進めることはできません。そこで、生徒のために教科指導を体系化する必要があることを先生方に直接伝え、理解が得られるように努めてきました」（東先生）

国語・数学・英語では16年度内に完成させて17年度からの活用を、その他の教科では17年度内に完成させて18年度からの活用を予定している。同テストを見据えた指導方針も明記して徹底を図り、例えば国語では、3年間を通して記述問題対策に力を入れることにしている。

「『書く力』の育成を通して、生徒の思考力・判断力・表現力を高めていきたいという思いがあります。そうすれば、同テストだけでなく、現行制度における大学入試にもしっかりと対応できると考えています」（富田先生）

### 生徒の生き生きとした様子が、教師の意識を変えた

ICTを活用した授業改善にも力を入れていく。指導ノウハウを全校で共有しようと、将来構想委員会の委員を始め、若手教師が公開授業を積極的に行っている。当初はICTの活用には戸惑っていた教師も、公開授業を見学したことをきっかけに、次第に前向きになっていった。

「使い方を教えてもらい、できるところから始める先生が増えてきました。公開授業を通して機材の操作が簡単なことに気づき、自分にも使えそうだと感じたからでしょう。また、生徒の生き生きとした様子を目のあたりにしたことも、先生方の意識変化を促したと思います」（前出先生）

ICTの活用により、板書の時間などが効率化されることで、生徒が考えを深めたり、生徒同士がグループワークなどに取り組んだりする時間を、多くの教師が設けるようになった。今後は、アクティブ・ラーニングをさらに推進する予定だ。ベテラン教師にも公開授業を行うように働きかけていきたいと、前出先生は話す。

「効果的な発問や生徒の興味・関心を高める解説といった、ベテランならではの指導のコツを、若手の先生にしっかりと伝承してほしいと思います。そうすれば、ICTの活用との相乗効果により、授業がより充実していくと考えています」

### 全校を挙げての指導改善を今後も継続していきたい

段階的な指導改善の成果は、生徒の姿に表れている。例えば、第1志望校を一般入試で受験する生徒が増え、推薦・AO入試で合格した生徒も、資格試験の学習などに自主的に取り組んで大学入学後に備えている。前述のように生徒の生活態度は落ち着いており、地域からの評価

も高まっているという。

「中学校を訪問すると、先生方から『御校は変わりましたね』とよく言われます。また、本校を志望した理由として、『勉強も部活動も頑張りたいから』と答える新入生が目立つようになりました」（富田先生）

また、16年度卒業生では、2年生のうちに志望校を決めていた生徒が65%いたが、それは過年度生に比べて約10ポイントの上昇で、進路意識の向上がうかがえる。

「枚高マップ」や「教科スタンダード」により、教師の目線合わせも進んでいる。例えば、地歴公民科では、以前は担当教師ごとに定期考査の問題を作成していたが、17年度から同学年では共通問題も取り入れることとした。

「先生方が話し合ったり、教材を共有したりする姿がよく見られるようになりました。互いの授業への理解を深めていけば、授業改善の原動力となると思います」（前出先生）

一方で課題として、1・2年生における家庭学習時間の伸び悩みが挙げられる。そこで、各教科・科目との連携をさらに密にし、学習課題の分量や出し方を工夫していく予定だ。

松浦校長は、今後について次のように語る。「本校は、全校を挙げて一歩ずつ取り組みを充実させ、少しずつですが着実に成果を得てきました。これからも、目の前の生徒、そして将来の生徒のために、先生方としっかりと力を合わせていきたいと考えています」